

V. 学び合う教師集団をめざして～研究の方法～

1. 開かれた教師の学び合い～学年・ブロックで教室を開く～

「ひびき合う三の丸の子どもたち」をめざして、それぞれの教師が独自に努力を重ねているだけでなく、互いに日々の授業や土台となる学級経営を見て、自分に足りないものを発見したり、よりよい方法を学んだりする機会を設けるようにしている。オープンスペースであることも有効活用し、通りかかりにふらっと立ち寄るような感じも多い。学年主任を中心に互いに声を掛け合い、教室を開く。特に、学級経営検討会の際、学年で重点的に教材研究を行おうと決めた単元については、子どもの思考に沿ったものになるように、学年で教材研究をし、互いにその実践を見合ったりしている。これまで本校の実践を積み重ねてきた単元構想の蓄積（HP 参照）を学年で閲覧し、それを例に自分の学級の思考に合わせて取り組むこともある。閉ざされがちな教室であるが、本校ではそうして教室を開き、互いに見合うことをよしとする雰囲気を大事にしている。

また、1, 2ヶ月に一度、「いちご研修」という名称でOJTのシステムを整えている。担当が職員の希望の多い内容を、各回のテーマに位置づけて行っている。研究とリンクする部分のテーマを設けることもあり、互いに学び合う関係作りの一助になっている。

2. 授業研究の方法と視点

クラスを開き、互いに見合ったクラスの様子は、学級経営検討会・単元構想作りに生かされる。

①学級経営検討会（年間3回）

学級経営検討会では、「ひびき合う」ために必要な土台づくりを重視し、「聴く・話す」のルールづくり・互いに関わり合おうとする関係づくり・自分の思ったことを表現できる雰囲気作り・粘り強くやり遂げる習慣などについて、話し合いをしている。学級経営案を持ち寄り、具体的な子どもの名前を挙げ、クラスの実態に合わせた具体的な方法を紹介し合って研鑽をし、土台作りをしっかりとできるようにする。学級経営案の書き方も年度当初に全体で確認をし、研究テーマとつながる学習活動や経営のポイントなどが記載されるよう、書式の中に入れ込むようにしている。

- ・5月上旬 学級経営案の書き方講習会
- ・5月下旬 第1回学級経営検討会（学年単位）
- ・7月 第2回学級経営検討会（異ブロックの教諭で構成されたグループ）

※縦のつながりで、どんな風に育てていけばよいかを考え、見つめ直す

- ・2月 第3回学級経営検討会（学年単位）

※1年間の取り組みがブロックテーマに照らし合わせてどうであったか検証する）

②単元構想づくり

単元構想づくりは以下のような流れで行う。

- ・一度全員で、単元構想づくりについての研修をする。（5月）
- ・どこの場面なら、子どもの問題が切実になるのか、追究し、ひびき合うのか
を、子どもの実態を見ながら学年またはブロックでよく相談する。
- ・事前に（前もって）自分で作ってみて、学年やブロックで検討し、授業に臨む。
「子どもの思考に沿っているか？」「子どもの思いで学習がつながっているか？」
「教師にとって都合のよい子どもの声で埋まっていないか？」「子どもの言葉から
問題が生まれているか？」などを見る。

＜※本校の単元構想の作り方は巻末資料参照＞

- ・本時の授業では、指導案+単元構想+本時案・座席表を準備する。

③授業研究を支えるみとり

○単元構想前

単元（もしくは年間）を通して、何人かを詳しく見とる。この子については、具体的な記録を取ったり（行動観察、成果物からの記録、写真）、学年やブロックでも普段から情報交換したりする。時折、クラスの様子を見合い、学年で交流したときの様子などもみとり、構想に生かす。

○単元構想時

どんなことが、目の前の子どもにとって問題になりそうか、普段の学級での様子、興味関心などをよく見とって単元構想を描いていく。0次案を作り、学年で具体的な子どもの名前を挙げながら、検討していく。授業が進むと同時に子どもが今どう思っているのかを見とり、0次案を書き換え、N次案を作り、本時に向けて単元を構築していく。

○本時に向けて

本時案には、座席表をつけ、それに、その単元の中での子どもの思いや期待する変容・ひびき合う姿を詳しく書けるようにする。（ただ、全員について書かなくても、そのような見とりができるだけ多くの子に対してできるようにスキルアップをめざす）授業者としてどの子をきっかけにひびき合っていくかを予想し、矢印などを書き入れる。また、気になる子や変容が見とりにくい子についても、どんな手立てをとっているのか、どう見とっているのか担任の意図や支援が見えるようにしていく。

○本時

「各ブロックのテーマ」と「ひびき合う姿をさらに具体的に考えたもの＜表2＞」を

参考にしながら、ひびき合いの姿をみとっていく。「全員が話しているかどうか」、ではなく、発言していなくても「どんな気持ちで友だちの話をきいているのか?」「友だちの考えをどう受け止め、自分に生かしているのか?」に注目して見とっていく。「ひびき合ったかどうか=声を出したかどうか」ということではない。

くみとりの3点セット>→座席表に書くようにする。

- その子の前時までの姿。
(★これまでの学習や生活の様子、★単元に入ってからの様子)
- 単元・本時に願う子どもの姿
- 願う子どもの姿を実現するための具体的な手立て

④授業研究

- ・基本的には、国語・社会・算数・理科・生活・総合・生活単元学習。ただ、「ひびき合う姿」をどの教科でも実践できていくことが、研究が普段の教育活動に生かされることにつながるので、他の教科・領域でも提案できる。
- ・授業研究では、子どもたちが、自分たちの問題を解決していこうと、友だちとひびき合う場面を見合えるようにする。また、問題をもつまでのプロセスも教師として学びの多いところである。ブロック研究や全体研究で積極的にそうしたプロセスを学べる機会をもつことを推進している。支援級は実態に応じて、好奇心を喚起する場面や導入でもよい。

3. 協議の方法

授業研究の視点は、以下の3つである。

- ★子どもが解決したい問題が切実になっていたか。
- ★ひびき合っていたか。
- ★それを支える（みとり、学級経営、「聴く・話す」の指導、自己決定と自己責任の習慣、教材分析、板書、教師の出所）は、適切だったか？

協議は、授業での子どもの言動をよく観察し、発言・反応・活動・表現物から見とったことを話し合えるようにする。そのために、一人ひとりが授業記録や写真を取って話し合う。子どもの名前や様子が具体的に語られる研究協議になるようにする。

協議記録は分かりやすくまとめるために、以下のような図式で行っている。（次頁参照）図にまとめながら、成果と課題に挙げられることを赤（成果）青（課題）の短冊に書く。グループごとに協議内容の記録を見せながら発表していく。各グループから出された短冊は、内容が似ているものを分類し、最後に研究主任が総括する。

三の丸の研究協議での記録のしかた

日付とクラス、単元名

問題がより切実であり、ひびき合う姿として願うもの。

よりよい学習問題となっていくために、より具体的に記入する。
上に行けばいくほど、願うものに近づく。
(赤でかこむ)

現状。問題点やよかったところ」
ここから出発します。問題点となる子どもの姿を書くようにする。
(問題点は青でかこむ)
(現状の良い点は特に囲まないで薄い色で)

横軸は、ひびき合いについて。
指導案にある、指導者が考える「ひびき合い」の姿。

よりよいひびき合いの姿が見られるためにはどうしたらよいか、記入する。

現状から、願うひびき合う姿に向けて必要なことや、具体的な手立てを記入していく。

自分たちの気づきから問題(意識)を持って、確かめる活動や話し合いを通して考えを深めようとする姿

・問題を「い」にしよう
(例えば…点が真ん中でなくてもいいと考えるか、
検査きはここ) 具体的に

・子ども自身が道具を集める
・子ども同士の見解のズレから話し合う

・話し合いの根拠が曖昧だった。
(でも皆が参加していた)

・学習問題が子どもの問題だったのか?
「ここがここじゃないのか」という問題と
「やらせ」作用点の問題の2つがあった。

・画用紙で道具を拡大して作る。かたなど分かるように
・板書は意見のズレが分かるようにする。

・力点、支点、作用点のシールをはる
(色分けをして)
・実際に係わりや検査する

研究協議の記録の仕方

日付 学年クラスを組み合わせでNoとする。 単元名「」

よりよい学習問題となっていくためにどうしたらよいか、より具体的に記入する。
上に行けばいくほど、願うものに近づく。
(赤でかこむ)

現状。問題点やよかったところ」
ここから出発します。問題点となる子どもの姿を書くようにする。
(問題点は青でかこむ)
(現状の良い点は特に囲まないで薄い色で)

もっとこんな板書だったら・・・
こんな言葉がけだったらなど、具体的なものを短冊や、ホワイトボードにもかけるように準備しておく。より具体的なもので学び合いたい。

具体的な手立てが強調されるように今年、「手立て」や「問題の設定の仕方」などを赤で囲むようにしていきます。よりよい表し方があれば、その都度ためてみてください。

よりよいひびき合いの姿が見られるためにはどうしたらよいか、記入する。(具体的な手立て)
(赤でかこむ)

問題がより切実であり、ひびき合う姿として願う子どもの姿(黄緑など囲む)

「ひびき合い」(指導者が考えるひびき合いの姿)

4. 研究を日常に生かす ～研究構想を意識した授業の研究レポート～

子どもの思考をみとり、細かく単元構想を書いて行う授業は年間何本もできない。しかし、本校の研究は日常に生かされない、年間のイベントのような授業研究をねらっているわけではない。少しでも子どもの思考にそった授業ができるように、子どもを見とったり、「なんでこうなんだろう?」「えっ? どうして?」と子どもの知的好奇心を喚起し、「子どもの問題」が産まれるような授業を普段に取り入れたりしていくことを推進している。学年で話し合って決めた重点単位の中で、どのように研究を普段に生かしたか実践レポートを書き、互いに情報交換し合っている。(A4 1枚程度。下記参照。)

【教科・単元】	国語 「お手紙」 (全14時間)
【学年】 2年	【報告者】 伊瀬谷 寛子
【実践内容】 ○単元目標 がまくんとかえるくんの行動や心の動きその理由などを想像しながら音読したり、書き抜いたりしながら読み取り、自分の思いを発表し合うことができる。 ○実践の概要 1 どんなお話だろう。 ・題名読みをする。 ・「お手紙」を読み、初発の感想を書く 2 みんなと、どんなことが話し合いたいかな。 ・なぜ、かたつむりくんにお手紙を渡したのだろう。 ・なぜ、4日も待つことができたんだろう。 ・なぜ、かえるくんも同じ気持ちなんだろう。 ・なんで、お手紙を書いたことを言ってしまったんだろう。 私なら言わない。 ・同じ「座ってお手紙を待つ」なのに、なぜ違う気持ちなんだろう。 など 3 気持ちを考えてみよう。(一人読み・書き込み) 違う気持ちなのかな? ・絵が違うよ。→前半：口が下に下がっている。目がぼーっとしている。 など - 後半：表情が明るい。目がいきいきとしている。肩を組んでる。 など 4 ふしあわせな理由はなんだろう。(ふしあわせから話し合いたい!) ・がまくんはお手紙が来ないからだと思う。 ・かえるくんは、親友が悲しんでいるからだと思う。友だちが悲しんでいたらいやだ。 →だから、急いでお手紙を書きに行ったんだ!→じゃあ、なぜかたつむりくんに渡したの? ・かたつむりくんを信じてたんだよ。サプライズのためじゃない?⇒かえるくんの動作化 ・急いでいたから、家を飛び出していたところにいたかたつむりくんに渡したんだ。 5 なんでがまくんは、待つのをやめてベッドに寝ちゃったの? ・お手紙が来ないから。・「ばかなこと言うなよ。」すごく怒ってる。⇒音読で確認。 6 なんで、お手紙のこと言っちゃったんだろう。 ・怒っているがまくんを見ていられなかった。親友が怒ったり悲しんだりするのは嫌になった。 ・これ以上怒らせたくない。もっと怒ってしまうから。 ・サプライズにはならなかったけれど、一緒に待ちたいから。 7 お手紙を待っている二人は、どんな気持ちだったんだろう。 ・二人で待つ時間が幸せ。 ・がまくんが嬉しそうだからかえるくんも幸せ。喜んでくれたから幸せ。 ・とても素敵なお手紙だったから、ずっと待てる。 8 「お手紙」の続きを書きたいな ⇒次の単元へ ★解決したい問題を創る工夫について 今までも、物語を読む学習の時には、初発の感想から問題を作ってきた。今回も、子どもたちの感想から話し合いを進め、自分たちで問題を作っているという実感が持てるよう、声かけをしたり意図的に指名したりしながら学習問題作りをした。そのため、初めから「話し合いたい!」という思いを持つことができたと思う。他にも、2年生にとって、また、私にとって初めての、まるごと読みにも挑戦してみた。「今はこの場面だから」という縛りがなくなっただけなのか、『親友』と最後に出てくるから、かえるくんはがまくんを大切な友だちだと思っている」と、初めから二人の関係性をとらえながら話し合いを進めることができた。さらに、黒板サイズの1枚の大きな模造紙に板書をしていくことで、今までの話し合いを子どもたち自身でふり返りながら話し合いを進めることで、話し合いがより活発になり、深めていくことができた。	

※この下に成果と課題もあるが、紙面の都合上省略